

キリストの光のキリスト

諸聖人(年間第31主日) 11月1日
(マタイ5・1-12a)

説教をする。そのために何度
も主日の福音を読み返す。みこ
とばは何を言っているのだろう
か。何を伝えたいのだろう
か。「主よ、話してください。僕
は聞いています」と祈りながら。
三十年近く、そのようなことを
繰り返してきた。

いろんなことに気づかされ、
いろんなことを話し、いろんな
ことを書いてきた。しかし、何か
が足りない。もう一歩、つっこ
んで考えれば、その先を真剣に見
つめれば、それが見えてくるの
に。そのことを知っていないがら、
肝心なところを無視してきた。

それがストレスとして心の奥
深くにたまっていった。なぜか息
苦しく、なぜかもどかしく、なぜ

諸聖人と歩く

かもう一歩前に進むことができ
ない。このままではいけない。こ
のままでは、もうこれ以上語る
ことはできない、と思った。限界
だった。

一人で巡礼の旅に出た。二十
五年ほど前に暮らしていたイタ
リア。ローマからアシジ、フィレ
ンツェ、ミラノと旅をした。

「神を信じているのなら、神を
信じている者として生きる」
どこからともなく、この言葉
が生まれ、それは消すことができ
なかつた。自分に足りなかつ
たこと、それは、生きるというこ
とだった。気づかされたこと、話
したこと、書いてきたことを生
きる。それが足りなかつた。
生ききっていない。信仰の原点

を見つめ直した。

ローマは二十五年前と変わって見えた。驚きや感動が信仰を増していたように感じていた昔の自分にはもういなかった。バチカンの聖ペ



ト口大聖堂に背を向け、ラテラノ教会を屈指してひたすら歩いた。ラテラノ教会はアシジの聖フランシスコが当時の教皇を訪ねた場所。教会に

近づいた時、自分の前を二人

のシスターが歩いていった。神の愛の宣教者会（マザー・テレサの会）のシスターだった。

アシジの一日目は四時に目が覚めた。「あなたに一つだけ足りないことがある」という言葉。イエスが金持ちの青年に言った言葉。その言葉が迫ってきた。とめどなく涙が流れ落ちる。おえつをともなつて涙が流れる。生涯でこれほど泣いたことはない。

「二つだけ足りないことがある」

夜が明け、聖フランシスコの墓の上にある祭壇でミサをささげた。その日は、聖フランシスコが聖痕を受けた記念日

だった。

ミラノでは、聖アンブロジオの遺体の上の祭壇でミサをした。巡礼の旅は終わった。人生の旅は、聖人の取り次ぎによって続けることができている。自分が意識していなくてもそれは事実。意識すれば、旅はもつと充実したものになる。

（山元眞＝福岡教区司祭／カット＝高崎紀子）

今週の福音

2日・月ヨハネ 6・37―40など
3日・火ルカ 14・15―24
4日・水ルカ 14・25―33
5日・木ルカ 15・1―10
6日・金ルカ 16・1―8
7日・土ルカ 16・9―15